

「プロジェクトでの体験とそこで学んだこと」

西武学園文理小学校 教諭 加藤順子

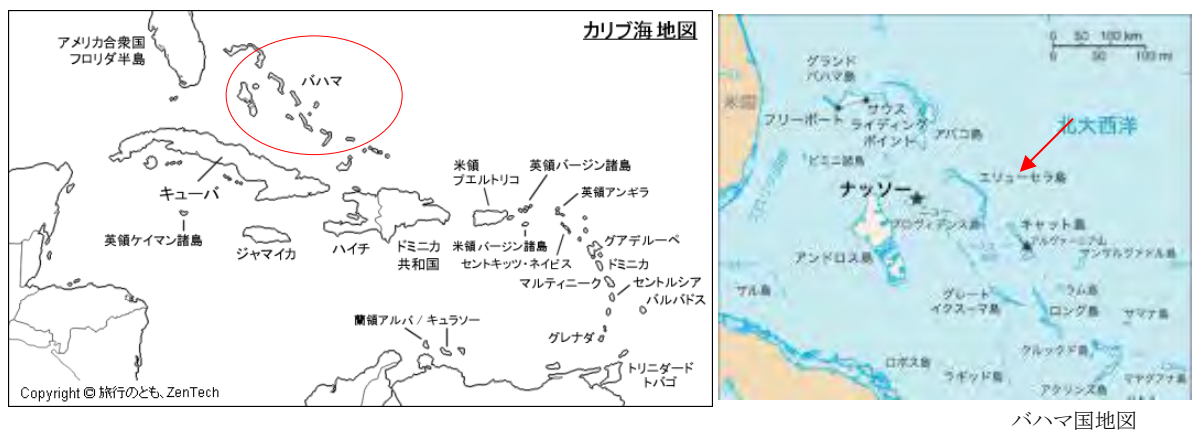
A) プロジェクト概要および作業内容

(1) プロジェクトの概要

参加プロジェクト名: Tracking Sea Turtles in the Bahamas バハマでウミガメの追跡

チーム名: Team 7

期間: 2016 年 8 月 13 日～8 月 21 日 (9 日間)



①バハマ国について

バハマ国(通称バハマ)、は 700 あまりの島(人が住んでいるのはそのうちの 30 程度)から成る、カリブ海に位置する国。公用語は英語。アフリカ系民族が 85%を占める。通貨はバハマドルとアメリカドル。1 アメリカドル=1 バハマドルという固定相場制で、旅行者にとっては、アメリカドルを両替する必要がないのでとても便利である。アメリカドルで支払えば、おつりをアメリカドルでもらえるが、バハマドルが混ざっていることもあるので注意が必要。首都ナッソーの国際線は、ほとんどがアメリカからの路線であり、アメリカへ出国する際は、ナッソーの空港でアメリカの入国審査を行う。それだけ、アメリカからの観光客が多く、アメリカとの結びつきが深いのだと思う。もともとはイギリス領であったこともあり、アメリカの文化とイギリスの文化が融合しているような国だった。

②プロジェクトについて

プロジェクトが行われたのは、首都ナッソーから小型飛行機で 25 分程度のエリューセラ島で、その南側に位置するロックサウンドという地域に、プロジェクトの開催場所である Cape Eleuthera Institute がある。

ウミガメは、食用として捕獲されてきた歴史がある。ワシントン条約で、ウミガメの国際取引は禁止されていたが、バハマ国内では 2009 年に、商業目的によるウミガメの捕獲が禁止された。エリューセラ島の周辺に生息するウミガメは、比較的若いウミガメである。それらが生息する場所を調べることで、ウミガメが好む自然環境(水深・水温・餌場など)を明らかにする研究を手伝うことが、このプロジェクトの目的である。

(2) 作業内容

作業内容は主に、「ウミガメの捕獲」「海中の撮影」「水草の調査」の3つである。

①ウミガメの捕獲について

まず、小さなボートに乗り、ウミガメを探す。ウミガメを発見したら、ボートでウミガメを追跡する。そして、十分に追跡し、ウミガメが逃げ疲れ、ボートがウミガメに近づいたところで、マスクとシュノーケルを着用して海に飛び込む。泳いでさらに追跡し、ウミガメの甲羅を両手でつかみ、捕獲する。

捕獲後は、大きなボートに戻り、体長や体重を測る。甲羅の大きさや厚み、顔の長さ、体重などを細かく記録し、後ろ足にナンバー入りのタグをつける。そして、捕獲した場所へと戻り、リリースする。

この作業に一番多くの日数と時間をかけた。ウミガメを泳いで捕まえるので、泳力と体力が必要である。しかし、参加者全員にとって、「ウミガメをつかまえる」というこの作業がとても楽しく、思い出に残る体験となった。



小さなボートでウミガメを追跡しているところ



甲羅の長さを測っているところ



頭部の長さを測っているところ



体重を測っているところ

タグを付けた様子

リリースしているところ

②海中の撮影

若いウミガメの天敵であるサメが、ウミガメの餌場に入ってきていないかを調べるために行われる。ビデオカメラを水中に設置し、GPS を使って設置場所を記録し、数時間後に回収する作業である。サメは沖から来るので、カメラは沖に向かって撮影できるように設置し、画面にサメが写るようにえさも設置する。作業時間は短いが、重たい機材を海に入れ、潜って作業をするため、ハードな仕事だった。

回収したビデオカメラの映像は、チームで分担して解析し、記録する。今回の調査では、サメを確認することはできなかった。



設置した機材



GPS で位置を確認しているところ



撮影した映像を確認しているところ

③水草の調査

ウミガメの好む水草のある場所で、ウミガメが餌をあさった形跡を探す作業。ウミガメが餌をあさった形跡がどのようなものであるかは、事前に映像で学習するが、フィールドで見つけるのはとても困難であった。それらしき場所は撮影し、GPS で位置を記録したが、特定はできなかった。

この調査は、マングローブの近くの非常に浅い場所で作業が行われる。長い時間シュノーケリングをするので、体力が必要であった。しかし、ゆったりと海の底を見つめながら泳ぎ、多くの海の生物にも出会うことが出来たので、楽しみながら活動できた。



ウミガメのえさとなる水草の確認

マングロープのある浅瀬で調査しているところ

調査中に見つけた海の生物

B) プロジェクトの体験から学んだこと

(1) 環境に関すること

①調査を通して学んだこと

バハマ国の豊かな自然にとっても驚いた。きれいな砂浜、エメラルドグリーンの海、沖を見ればコバルトブルーの海。そして愛らしいウミガメ。調査の日は、1日ボートの上で過ごすが、調査が早く終わると、Blue Hole というダイビングポイントに連れて行ってもらった。そこは、ウミガメが多く生息する場所とは異なり、サンゴ礁に多くの熱帯魚が生息していた。この美しい光景と、かわいいウミガメを大切に守っていきたいと思った。



かわいらしいウミガメ



プロジェクト期間中、エリューセラ島に住む子どもたちが、ウミガメの学習にやってきた。いわゆる校外学習のようなものだと思う。子どもたちは、わたしたちが捕獲したウミガメを近くで見て、交代で触って、歓声をあげていた。ウミガメが生息する島の子どもたちが、「ウミガメがかわいい」、「守ってあげたい」と感じることは、保護活動にとって重要な意味があると思う。外国の研究者が調査したり、国が保護したりすることも大切だが、「自分たちの住んでいる環境を自分たちで守りたい」と考えた子どもたちが大人になれば、環境は保全できるだろう。それは、日本でも同じことだと思った。子どもたちが、身近な環境問題に関心を持ち、問題の解決につながる具体的な行動ができるように教育することは、学校教育でも積極的に行われるべきだと学んだ。



地元の子どもたちがウミガメをさわっているところ



ウミガメと記念撮影

②生活を通して学んだこと

プロジェクト開催地である Cape Eleuthera Institute は、Island School という教育施設の敷地内にある。Island School にはウミガメだけでなく、深海魚やサメを研究する団体の施設もある。

Island School は、自給自足を目指している。野菜や果物を栽培し、ニワトリやブタも飼っている。施設内の家具は、敷地内の樹木で作られ、太陽光パネルもある。ごみの分別が徹底され、生ごみ、紙、プラスチック、ビンなどに分類される。施設の壁や床は、空き瓶を利用した装飾がなされている。水は雨水を浄化して使われている。

私が滞在している期間に、アメリカから 30 人ほどの中学生が work Camp に来ていた。お皿洗い当番で、滞在している中学生と一緒に作業をする機会があった。Pre-wash → wash → Rinse 1 → Rinse 2 と4つのシンクに皿を入れて洗っていく。このやり方で、40 人～50 人分のお皿やカトラリーや鍋を洗うが、一度も水をかえずにきれいに洗い上げることができる。普段の洗い物に、無駄な水や洗剤を使ってしまうことを、皿洗い当番をすることで学ぶことができた。アメリカの中学生も同じことを感じたのではないかなと思う。

ここでの生活は、食事は食べられる分だけとるように、シャワーで使う水は必要最低限で、使わない電気は消すように・・・と様々な協力を求められる。どこで生活をしていても、気を付けなければならないことだが、普段の生活でついつい忘れがちなことを思い出させてもらえる良い機会となった。



(1) 国際理解に関すること

① 英語について

プロジェクト中、わたしは「他の仲間がいるときに、日本語はなるべく使わない」ことを心がけていた。これまでの経験から、自分たちの言語で話をしていると、他の言語を使う人と交流する機会が減ってしまうと感じていたからである。そして、「なるべく一緒に時間を過ごす」ことも心がけた。自由時間は会話に入っていくことができなくても、一緒に談話室で過ごし、夕食や買い物に誘われれば一緒に出かけた。すると、英語力に多少ハンディがあっても、少しずつ仲間とのつながりが生まれてきたように思う。

今回のバハマは、場所の関係からか、アメリカからの参加者が6名と多かった。日本人が2名、イギリス人1名、イギリス在住のタイ人が1名という構成で、英語が第一言語または堪能な人ばかりだった。

たとえ英語力が同等でなくとも、英語という共通のツールを持つことで、コミュニケーションが円滑に進む。他国の人と共同作業をしながら、交流を持つことは、素晴らしいことだと思う。お互いの国について話し、お互いを理解し合うことは、とても重要だと思う。英語はとても便利な言語であり、英語力に磨きをかければ世界はもっと広がるだろうと改めて感じた。



自由時間に談話室でくつろぐメンバー



自転車に乗って夕食へ



作業を通じて生まれる仲間意識

②プレゼンテーションスキルについて

プログラム期間中、毎晩のように様々な国から来ている研究者が、自分の国や研究内容についてのプレゼンテーションを行った。内容もさることながら、わかりやすい英語で、原稿を見ず、素人にも理解しやすい発表する姿を見て、とても感心した。勤務校でもプレゼン教育に力を入れているが、もっと磨きをかけ、児童が将来外国に行っても役立つプレゼン力を身につけさせたいと感じた。また、私自身も、自分の国や仕事について、いつでも英語でプレゼンができるようにしておこうと思った。



毎晩行われた、研究者によるプレゼンテーション

③コミュニケーションスルについて

私は、プロジェクト参加にあたり、「積極的に活動しよう」と心に決めていた。初日に、「皿洗い当番をやってくれる人は？」と聞かれた。「これならできる」と思い、すかさず手を挙げた。調査中も、「やってみてみたい人は？」と聞かれ、自分でできそうな作業であれば、すぐに手を挙げた。そうすることで、名前を早く覚えてもらえたり、話しかけてもらえる機会も増えたりしたと思う。

下の写真は、特に見習いたいと思うコミュニケーションスキルを持った人たちである。左は、ポール。私と同じく初日に皿洗い当番に立候補した。いつでもどこでも誰にでも話しかけ、すぐに友達になってしまう。部屋の掃除も率先してやってくれた。真ん中は、ポールの娘、エリー。ウミガメの捕獲で、スイマーが失敗すると励まし、成功すると誰よりも大きな声で一緒に喜んだ。相手がだれであっても、仲間を励まし成功をともに喜ぶことができる高校生だった。右はアリソン。英語がわかりづらいときはわかりやすく説明し直してくれたり、一人にいる人に必ず声をかけたりしてくれる、優しい理科の先生。コミュニケーションスキルは万国共通であると、今回のプロジェクトに参加して改めて感じた。



誰にでも話しかけるポール



誰よりも仲間を励ました



わかりやすく説明してくれる

C)アースウォッチでの体験が学校教育にどのような意味を持つか

①実施した内容

勤務校は私立の小学校で、英語に力を入れており、児童は1年生から英語を学習し、日常生活でも英語に触れる機会が多い。多くの外国人教員が勤務しているため、外国人というだけで身構えてしまうということは、他の学校の児童に比べると少ないと思われる。

私が受け持つ5年生は、7月に16日間のイギリス短期留学に全員が参加した。小さいころから英語に慣れ親しんでいるとはいえ、イギリスの寮生活を通して、外国人の子と楽しくはしゃぐ姿を見ると、そのコミュニケーション能力に驚かされた。

そんなイギリス短期留学を経験した児童の中には、私がバハマで学んだ「国際理解に関すること」に共感し、イギリスでの経験を振り返ったり、次に生かそうという意欲を持ったりする児童も多いのではないかと考えた。そのため今回は、国際理解という視点で授業を行うことにした。

授業では、下記のプレゼンテーション資料を使用した。内容は主に、(1) 国際ボランティアについて、(2) バハマ国について (3) ボランティアの内容 (4) バハマで学んだこと、である。

「(3) ボランティアの内容」は、本レポートの A)-(2)-①の内容、「(4) バハマで学んだこと」は、本レポートの B)-(2)の内容を、小学校 5 年生向けにして話をした。



VOLUNTEER WORK IN BAHAMAS
国際ボランティアワークで学んだこと



活動内容
「ウミガメ保護」のお手伝い

How can we catch the turtle?
ウミガメの捕まえ方





ボートでウミガメの生息地へ
→小さなボートで追いかける
→泳いで追いかける

ウミガメの大きさを測る。(甲羅 側)



ウミガメにタグをつける。



ウミガメの体重を測る。



ウミガメを海へかえす。



What I learned in Bahamas.
バハマで学んだこと

- ① **英語**は世界中の人と仲良くなる言葉
☆ 全員がわかる言葉(英語)で話す。
☆ 日本語は使わない。
☆ できる限り、交流する時間を多く持つ。
- ② できることは**積極的**に
☆ 「やってくれる人?」「やりたい人?」と聞かれた時は、できそうなことには手を挙げる。
☆ 人がやりたがらないことは、特に積極的。
- ③ **プレゼンテーション**ができるように
☆ 自分の国や仕事の内容については、英語でいつでも発表できるようにしておく。












②児童の反応

児童は興味を持って耳を傾けていたようである。映し出されるバハマやウミガメの写真には、特に興味を示していた。授業の最後に感想を書かせたので、以下に紹介する。

- ☆ ぼくも英語は世界中の人と仲良くできる言葉だと思った。
- ☆ どこの国でもだれでもいっしょにくらして、英語で積極的に外国人と話せば、仲良くなれるのだなあと改めて実感しました。

- ☆ イギリスでは日本語を使っていたので、これからは外国に行ったら、日本語ではなくなるべく英語で話したいと思います。
- ☆ イギリスでも食堂で一緒にごはんを食べているうちに、いつの間にか友達になっていたのも、先生の話と同じだと思った。
- ☆ 将来大人になっても、他の外国人とのコミュニケーションを大事にしたいです。
- ☆ 色々な国から色々な世代の人がボランティアに来ているのにおどろきました。
- ☆ 将来僕も英語を話せるようになって海外ボランティアに行ってみたいです。
- ☆ ボランティアというとアフリカというイメージがあったけど、ウミガメの保護と聞いて少しおどろきました。
- ☆ バハマという国の名前は初めて聞き、とても海がきれいでした。
- ☆ バハマの海がきれいだからウミガメが住みついたのだと思います。
- ☆ ウミガメはかわいいなあと思いました。海もきれいだなと思いました。
- ☆ ぼくも外国に行ってボランティアに参加して、自然保護をしたいです。
- ☆ 動物に関してのボランティアをしてみたいと思いました。

イギリス短期留学を通して、国際交流の楽しさや難しさを実感した児童らしい感想だと思う。英語の大切さをこれまで以上に理解し、国際交流への意欲が高まったとうかがえる感想が多く、うれしく思った。将来、国際ボランティアに参加する児童が出てきてくれることを、大いに期待したい。また、「国際理解」という視点からの授業であったにも関わらず、バハマの自然や動物の保護に関して興味を抱いた児童が多かったことにも驚いた。

③今後のビジョン

今回は「国際理解」という視点で授業を行ったが、次は「自然保護」を視点にした、本レポートのB)-(1)の内容を授業で扱いたいと思う。私はESD「持続可能な開発のための教育」に興味を持っている。このプロジェクトでの体験を、様々な視点から児童に伝えながら、ESDを少しでも実践できればと思う。

<おわりに>

「バハマでウミガメを追跡」のプロジェクトに参加させていただいたことに、深く感謝します。子どもたちが将来、環境問題や国際問題に関心ある大人へと成長できるよう、今回の貴重な体験を役立てていきたいと考えています。多大なるご支援をいただき、ありがとうございました。